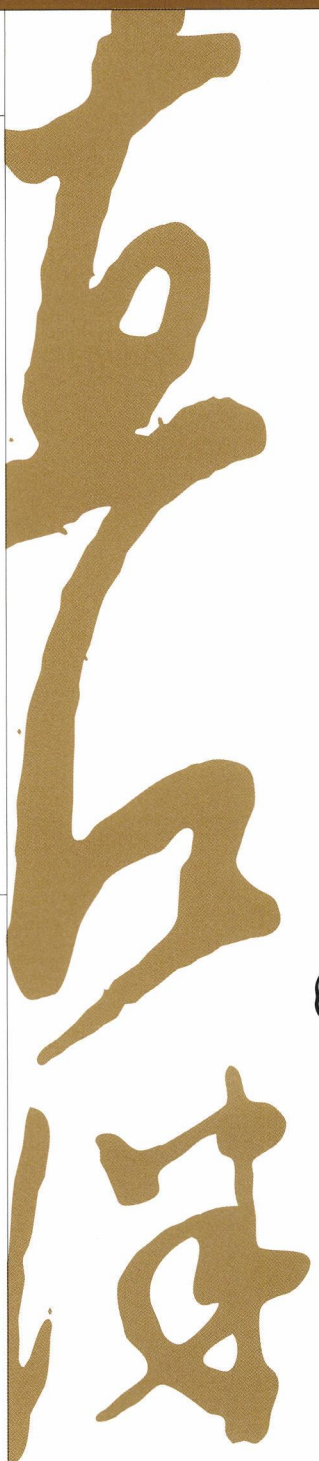
季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

秋号

2004

9,10,11月

「川」の恵み

巻頭エッセイ◉このまちのこと

何処へ、行くんだった？

自然の魅力豊かな

五智公園に出かけよう

◉ ひろば ◉

妙高・池の平温泉開発の恩人

星野錫翁

【カメラの眼】

追慕の碑（いしぶみ）

親鸞聖人上陸の地を巡る

季刊 直江の津 第14号 秋号
2004—9・10・11

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
何処へ、行くんだった？　ひぐちきみよ　3

■「川」の恵み　監修　久保田好郎　4

母なる川、関川の再生を　濁川明男　12

■自然の魅力豊かな五智公園に出かけよう
古澤良彰　18

■ひろば
妙高・池の平温泉開発の恩人　星野錫翁　星野達雄　24

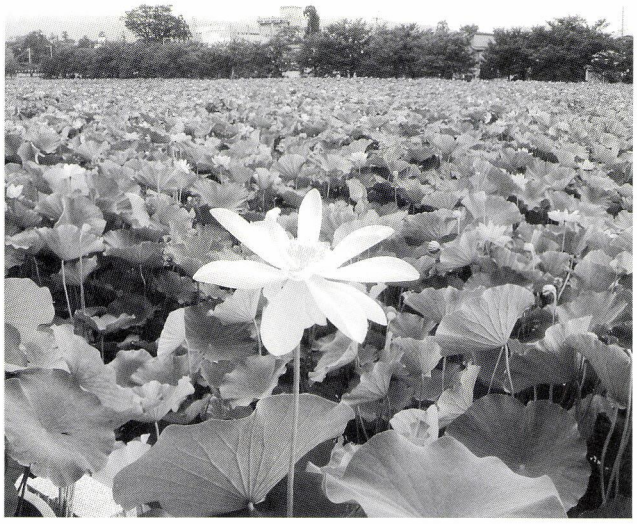
■カメラの眼　16

■読書びと　聲のさざなみ　道浦母都子著　28

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



舞姫蓮（まいひれん）
美智子皇后お好みの蓮（高田公園）

♣巻頭エッセイ
樋口喜美代さんのこと
昭和33年　東京生まれ　12年前より上越在住
CMプロダクション勤務後、絵コンテ制作などを経てイラストレーター。
「朝日小学生新聞」、東宝シナリオスクールなどで仕事中。
最近は高田寺町・高田の町屋巡り“てなもん屋道中”決行中。またアクセサリー製作などの萬屋稼業。

何処へ、行くんだった？

ひぐちきみよ

直江津は迷路だ。

重度な方向オンチのアンタが悪いと言われてしまえばその通りだけれども、あたしはいつも自力で目的地にたどりつけなくってうろうろグルグルしている、時間さえ許してくれれば直江津ラビリンスはとても楽しいのであるが。

どんなママが迎えてくれるんだろう?と思うような昭和の匂いの看板のＢＡＲやらスナックの裏口から小さな橋がかかり、川が流れている。一度橋を渡ってみたいのだが、酒場を裏口から訪ねるのもなんかおかしい。

土蔵のお寺の池をじーっと覗きこんでいるとぷかーっと哲学的な顔の亀が水面に浮かんでくるのである。亀は眠たいような表情でまた池の中に消えていく。覗きこむあたしと哲学亀は場所を少しづつ移動しながら、哲学的な会話を繰り返すのである。

確かに直江津にはzippoの看板の店があったと思い、地元の知人に携帯で尋ねながら（彼にはzippoの店、の一言で通じた）たどり着いたライター屋さんには様々なモンローの絵柄のzippoが揃っていてとても素敵だった。

そう言えばここが一文店やさんだったんだなぁ、するとそこがストリップ小屋だったわけだ。この角を右に曲がると友達の実家だっけかな?

こんなところに旅館があるよ。前来たときにはわからなかった。そんなこんなで空腹になり、ふと目にとまった洋食メニューに誘われて、きしむ階段を上って、エビフライ定食を食べてしまったりする。満たされて、また歩き始めて、いつのまにか海が見えると、その景色こそが本日の「あがり」だったように思えて、そうかぁ、波の音が聞きたかったんだねと心がつぶやくのである。

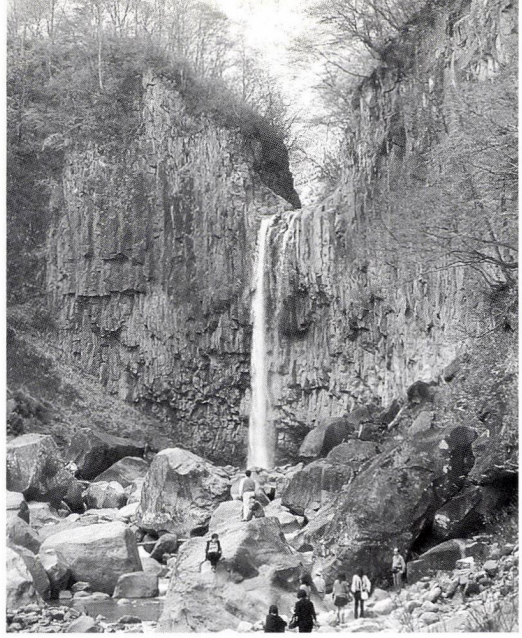
花火の晩は直江津の友達の道案内で、屋台の行列をずーっと眺めて、神輿に遭遇してわーって気持ちになって、お行儀はよくないけれどやっぱり幼い顔している悪ぶった子供達のひしめく夜店をひやかして歩く。笛や太鼓の音色、花火ひらく夜空。しかし祭りのあとに来てみれば、屋台はどこを連なって通ったのだろ?夜店はどの辻に並んでたんだろ?ウラシマ太郎の気分で呆然と立ちすくむ。しかし、「あのひと立ちすくんじゃってるよ」って誰かに悟られるのも癪な気がするので、そ知らぬ顔でまたしてもうろうろグルグルし始めるのである。祭りのきらめきと音色と狂気は全部まとめてパンドラの箱に吸い込まれるように、屋台会館に閉じ込められたのだろうか。

「川」の恵み

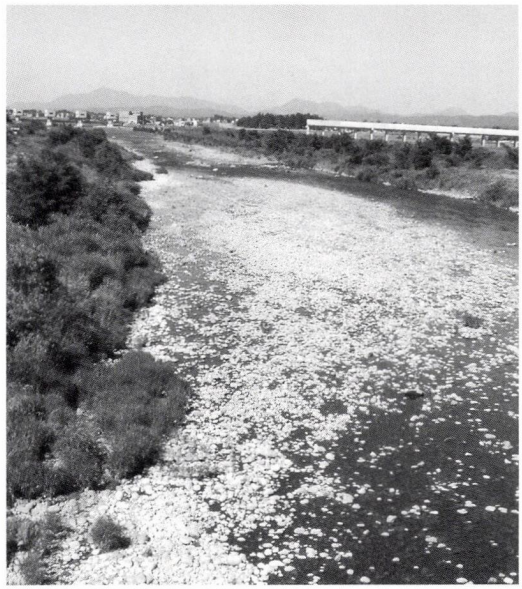
関川の源流　笹ヶ峰ダム・乙見湖（写真『上江用水』史より）



■監修　久保田好郎　くぼたよしろう



上　苗名滝（水の涸れた時）
下　関川　十ケ字用水取り入れ口付近





頸城の大地を潤おす

全長六四キロメートルの関川は、火打山・焼山の水を集める真川と長野県境の山々から流れるニグロ川を水源としているが、沢の行き止まりの高さ（水乾）によって真川をその本流としている。この二川が関川を生み、笹ケ峰ダムが作る乙見湖を満たして、発電所のタービンを回し、田に水を配り、数々の支流を合わせて日本海に突き刺さるようにして飲み込まれていく。

その関川の二大支流の一つ矢代川は、火打山の東面を源として関川に注ぐまで二九キロメートルという県内屈指の急流である。かつては「妙高が曇ったら家に帰れ」と言われたほど、上流で一時に大量の雨が降ると、段差をつけて流れの上に覆いかぶさるようにして水が押し寄せてくる。この津波のような出水は「花水」と呼んで恐れられていた。

保倉川は関田山脈の野々見峠を発して、小黒川、飯田川などの東頸城丘陵をうるおす支流を合わせ、関川に合流するまで五四キロメートルの関川最大の支流である。しかしこの保倉川は、もとは直接日本海に注ぐ独立した川であった。江戸時代始め、大潟などの新田開発に伴う排水の向上のため、旧福島城の外堀を利用して関川河口に注ぐようにしたものである。この川の大きな特徴は、全国的に知られた下流部の激しい蛇行（メアンダー）と、それによってできた河跡湖である。蛇行は氾濫しやすい反面、流れを緩やかにし舟の運行にはよい面もあった。改修によって蛇行はなくなったが、今でも多くの河跡湖を見ることができる。



水の害

関川水系の水害の歴史は、数えればきりが無く、伝説や改修記念碑がそれを物語っている。記憶に新しいのは、平成七年七月十一日から十二日、高田で一時間の最大雨量が五三・五ミリという観測史上第二を記録する集中豪雨で発生した「七・一一水害」であろう。

特に関川と姫川に氾濫が集中し、関川では新井の上流にかけて九本の橋が落下または通行不能となり交通が寸断され、さらに水田の冠水、家屋の浸水、発電所の破壊など、被害は上越地方の全域におよんだ。

平成十一年、建設省（国土交通省）は一千億円余の事業費によって、被害のあった関川水系の災害復旧を完成させた。







右上　久比岐野川街道　関川を見守る一里塚
7・11水害の復旧を記念して建てられた
妙高高原町蔵々地区
左上　舟つなぎ石　関川河畔・新井市広島地区
下　関川に舫う川舟　大正初年



川舟

交通手段の乏しかったころ、河川を利用した舟運による物資の運搬は一般的なものであり、関川を中心とする頸城平野の河川も舟運があったと思われる。保倉川の支流小黒川の津止（つやみ）、飯田川の高津、桑曽根川の山高津など、上流部に湊（川湊）を意味する〈津〉と名づけられた地名によって知ることができる。船津、片津、日根津なども大潟・大潟新田開発以前の舟運による地名だと想像できる。

しかし、舟運が盛んに行われるようになったのは、松平光長の時代（一六二四～一六八一）に関川の浚渫を行って、現在の板倉町田井まで舟が自由に往来するようになってからである。稲田の上（かみ）の荷揚げ場、下（しも）の荷揚げ場に藩内各地の郷蔵から年貢米を高田藩の御米蔵に輸送し、それを今町（直江津）の米倉に輸送する。また幕府領の米も今町の米倉に輸送されるなど、米の舟運を中心に多種の物資の運搬が盛んになった。その川舟の運行と所有権は今町に与えられていた。その川舟の運行と所有権は今町に与えられていた。その範囲は関川の河口から、関川は田井・広島、保倉川は飯室・今熊、飯田川は中真砂・百々、潟川は高橋・米倉までである。

川舟によって今町に集積された米は、北前船によって大阪・江戸に運ばれている。天保三年（一八三二）を例にとると、

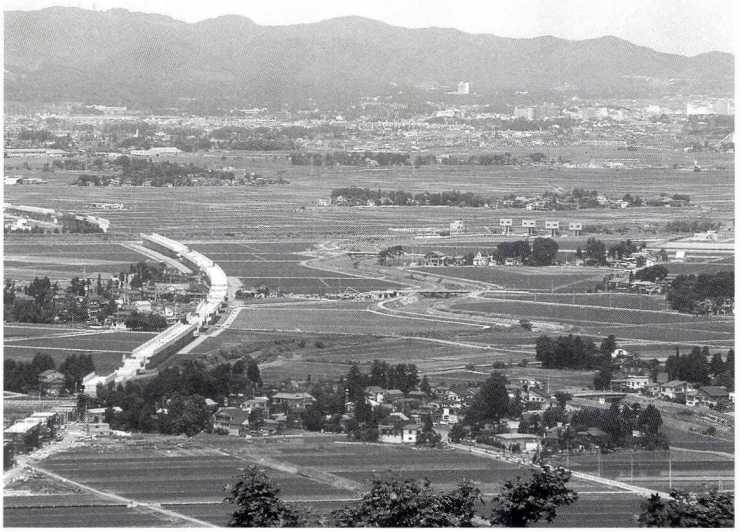
お城米（幕府領）二万一千四百六九俵
お蔵米（高田藩）四万九千四百五五俵
商人米（民間）五万俵

であった。逆に上流へ遡るものは、海産物、塩、材木などであった。

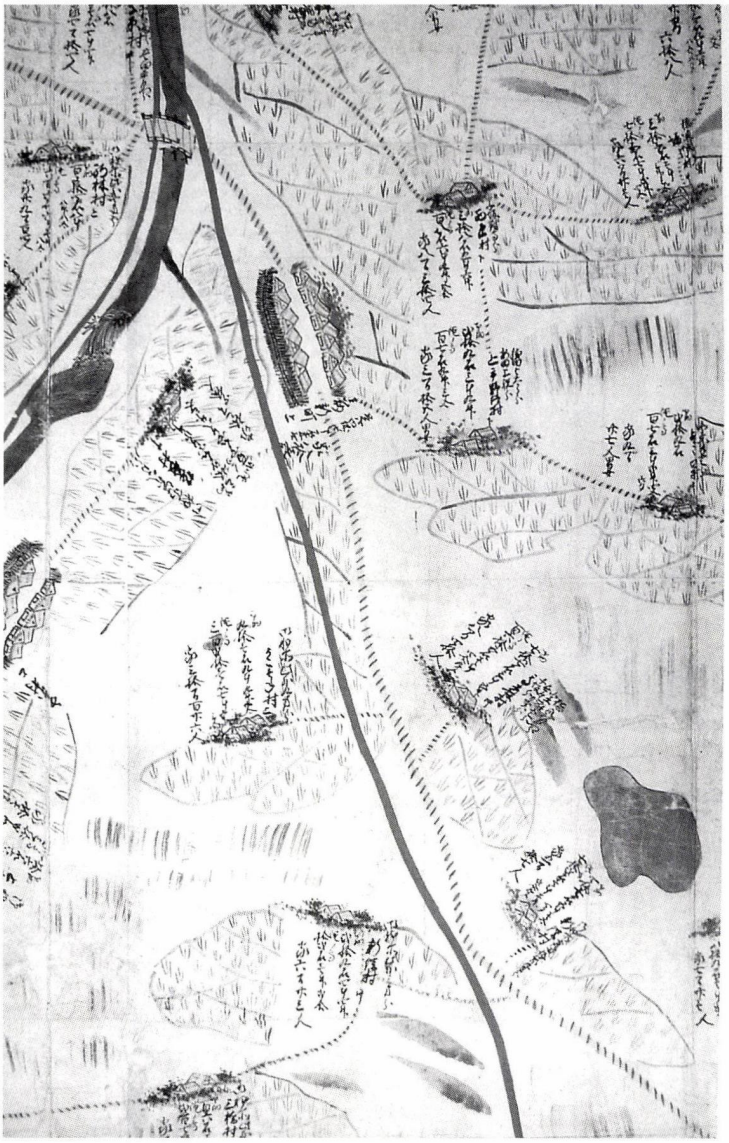
保倉川では大正時代まで米の輸送に使われるなど、近代に入っても河川が交通手段として使われていたが、経済の変化や道路の整備、鉄道輸送の発達と共に徐々に姿を消して行った。



祇園の神輿の川下り



上　箕冠城跡（板倉町）より頸城の平野を望む
白い曲線は工事中の北陸新幹線
下　「越後国郡絵図」（「掘り起こされた中世のまちとむらのくらし」より転載）
図中の左上は飯田川、横曽根・真砂などの地名がわかる





田を潤す

上杉景勝時代にが描かせた慶長二年「越後国郡絵図」の頸城郡を見ると、関川東部（西部は不明）の景観が詳しく描かれ、村落や溜池、堰、用水などを見出すことができ、稲作が行われていたことがわかる。しかし高田（頸城）平野は、関川・矢代川・保倉川などで形成された沖積層で、河川は蛇行し絶えず氾濫を繰り返りしていた。この河川を治水し大規模に平野が開田されていくのは江戸時代以降になる。

江戸前期の新田開発は高田藩により、中期以降は町人・地主などの豊かな財力を背景にしたものであった。新田開発がピークに達したと思われる十七世紀、松平光長の時代の所領は二十六万石であったが、実質三十七万石に達していたことでも、新田開発がいかに活発に行われていたかがわかる。

高田平野には関川を中心とする河川の水を取り入れる八つの用水がある。そのうち中江・上江・稲荷中江の用水は関川三大用水といわれ、保倉川水系の大潅用水と合わせて高田平野の四大用水と呼ばれている。紙面の都合で中江・上江・大潅をとりあげる。

中江用水は、寛文年間（一六六一～）の大干ばつ後、郡内の大肝煎の有志で開削を試みたが、資金が続かず藩営の事業として実施さ

れている。家老小栗美作は河村瑞賢を招いて苗名滝や野尻湖などの水源を調査し、延宝二年（一六七四）から三年計画で、新井市の西条で関川の水を取り入れ、江幅七・二メートル、江丸（堤防）幅各三・六メートル、全長二六キロメートル、関川東部平野を流れ保倉川に落ちる大用水を完成させた。

高田平野東部の丘陵地帯を潤す上江用水は、草創期（天正年中に源流部の開削が始まったといわれている）を除いても、正保元年（一六四四）の開削から約二〇〇年の歳月を要している。

上江用水の注目すべき点は、中江のような藩営工事ではなく農民の意思によって次々に掘り継がれたことである。新井市の川上地区の関川から取水し、開田山脈の山麓を等高線に沿って屈曲しながら開削するために大変な苦労を強いられた。なかでも安永四年（一七七五）、川浦村（三和村）の下鳥富次郎主導による掘り継ぎは、祖父源助の代から八十年の歳月をかけて許可を得るという悲願が実ったものであった。工事は清里村深沢地区から櫛池川の下を八六メートル余の底樋を通して飯田川に結び、三和村一帯に水を引こうというものである。四・三キロメートルの工事に三年を要した。

この両用水は南北に流れ、関田山脈を背景とする古用水とほぼ直角に交わるため、上を水道橋（掛樋）、川底を埋樋・底樋・伏越などのトンネルで横断、川に一度水を落として堰を設けて対岸で取水するなど、さまざまな工夫が凝らされている。また古用水や上流部の既得権を守るために用水費を負担しない〈客水区〉が設けられ、その水利慣行は最近まで続けられてきた。

保倉川は野々見峠を源流として、関川に合流する関川水系最大の川である。この保倉川と潟町砂丘によってできた広大な潟湖（ラグーン）や沼沢を干拓し、田園地帯に変える事業が始まるのは近世初めのことである。高田藩家老小栗五郎左衛門の指揮下、高田上小町の豪商宮嶋作右衛門の資本と上州浪人神戸三郎左衛門・茂田七右衛門の技術指導によって、保倉川から水を取り入れる大湊用水が六年の歳月をかけて開削され、石高七五七五石の大潟新田が生れた。翌正保三年（一六四六）には、大潟新田の北側、朝日池・鵜ノ池・蜘ケ池などの潟湖の南側に幅一四メートル、全長一三キロメートルの排水路（潟川）を掘り、黒井の洞仙野で保倉川に落水させて干拓する工事が行われた。

しかし、寛文五年（一六六五）の高田大地震で潟川は排水機能を失い、河村瑞賢の指導の下、潟川の排水の円滑化と今町湊（直江津）の改修を兼ね、直接日本海に流れ込んでいた保倉川を二・三キロメートルの新川で関川河口に放流する大工事が行われた。これで大潟新田が生れ、四〇年間にわたる大潟郷新田開発の事業が完了した。

元来、潟川は保倉川との高低さが少なく、水量の多い保倉川からたびたび逆流し、大潟新田は湛水に苦しめられていた。宝暦元年（一七五一）の大地震は再び上越一帯に大被害をもたらし、大潟の後背地開発は一瞬にして荒野と化した。この中で生れたのが、現犀潟と渋柿浜の両村の間に新川を開削し、潟川を日本海へ落とす構想である。宝暦六年（一七五





上　板倉発電所の放流水を合せた直後の中江用水
下　前方の山部小学校（板倉町）より高い位置の山腹を流れる上江用水。上流では北陸新幹線トンネル入り口の真上を流れる

河村瑞賢
一六一八～一六九九
江戸前期の商人　海運・治水の功労者
伊勢国に生れ、一三歳で江戸に出て車力から身を起こし材木商を営む。明暦の大火（一六五七）に乗じて木曾の山林を買い占めて膨大な資産を作り、土建業に乗り出し幕府・諸藩の土木工事を請負う。寛文一〇年（一六七〇）、陸奥国の幕領米の江戸廻漕を請負い、房総半島を廻る〈東回り海運〉を開く。寛文十一年（一六七一）には、出羽国の幕領米の廻漕を請負って〈西回り海運（北前船の航路）〉の再開発を行う。鉱山開発などにも功績がある。



上　潟川の水を日本海へ直接排水する新堀川
中　県内最古の蔵々発電所
下　野尻湖の水をコントロールする池尻川発電所

六）ようやく着工されたが、砂丘を掘るため、完成間もなく風雨よって崩壊し、天保六年（一八三五）の再工事で、ようやく潟川の水が吐き出されて大潟新田が蘇った。この新堀川は、冬の荒波で河口に砂が堆積して塞がれるため耕地が湛水、海水が逆流するという致命的な欠陥を持っていた。暗渠排水、排砂ポンプなどの設置によって解消するのは、一九八〇年代になってからのことである。

大潅用水の開削以来、用水と排水というまったく逆の戦いが三百余年営々と続けられ、今日の穀倉地帯を出現させた。

現在、関川水系の用水は、すべて国の事業として整備されている。



発電

明治二四年（一八九一）京都の蹴上発電所が日本最初の営業発電を始めて以来、全国に電力開発の気運が高まった。上越地域でも明治三六年（一九〇三）、金子伊太郎（現新井市出身）らによって上越電気株式会社が設立され、関川の電力開発の第一歩を踏み出した。

京都大学を卒業したばかりの青年技術者国友末蔵を招聘し、現妙高高原町蔵々集落の関川上流に水門を設けて水を取り入れ、関川最大の屈曲部に導き、五〇〇メートルの導水路によって三三メートルの落差を利用し、五〇〇キロワットの電力を得る蔵々発電所を完成させた。かくして、明治四〇年（一九〇七）五月三日、高田・直江津・新井の三町に上越初の電気の火が灯され、明治四二年には早くも工業用電力として使用されている。蔵々発電所は県内最古の発電所として現在も稼動している。

昭和十五年、関川最下流の板倉第二発電所が完成し、現在まで十二の発電所が、隧道を





流れるもう一本の関川の水を次々に電力に変え、関川沿岸に工業地帯を出現させ、農業の動力に、家庭にと送られることになった。

関川の水は、農業と電力の〈共存〉関係で利用されている。

昭和九年建設された池尻川発電所は、日本初の季節的揚水発電所である。冬季期間の関川の渇水期に、野尻湖の水を落として池尻川発電所で発電（これは下流の発電所の発電力も高める）し、逆に融雪期には関川の水を発電機からモーターに変えて、高度差七五メートルの野尻湖に揚げて灌漑期に備えようというものである。また、鳥坂発電所の放流水と関川の水を板倉調整池で上江用水が取り入れ、下流の板倉発電所も五・六キロ隧道で取り入れている。そして板倉発電所の放流水は中江用水に取り入れられている。（中江用水は、七・一一水害以降は全て板倉発電所の放流水）

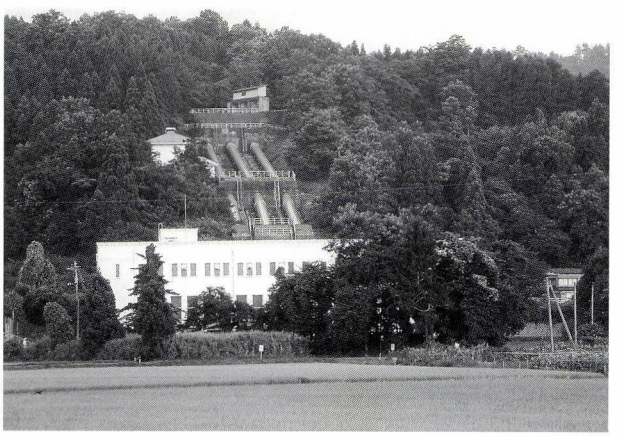
これらは野尻湖と笹ヶ峰ダムの農業用水を電力が利用しながら農業を支えるという〈共栄〉を図った結果である。

■監修者／上越市史編纂室長

参考資料

上江用水史　上江用水組合
中江用水史　中江用水組合
矢代川の流れは語る　新井河川愛護協会
妙高高原町史　妙高高原町
頸城村史　頸城村
関川のおいたち　建設省北陸地方建設局高田工事事務所
直江津町史　直江津町





上　板倉調整池
　鳥坂発電所と関川の水をあつめて板倉発電所と上江用水へと分ける
下　板倉発電所
　関川最下流の発電所、放流水は中江用水に入る。導水管の下を横切って山の中腹を上江用水が流れる

コラム

国友末蔵

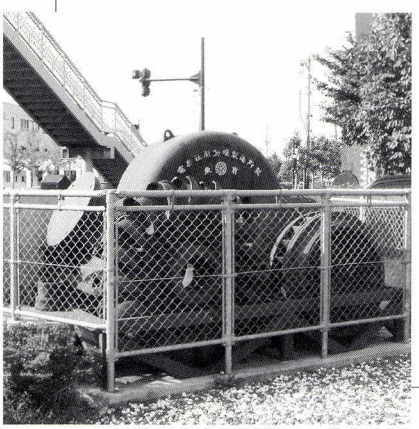
京都で活版印刷機製造業を営む家に生れる。先祖は近江国国友村の鉄砲鍛冶。

明治三九年（一九〇六）京都大学卒業と同時に、上越電気会社の主任技師として招かれる。

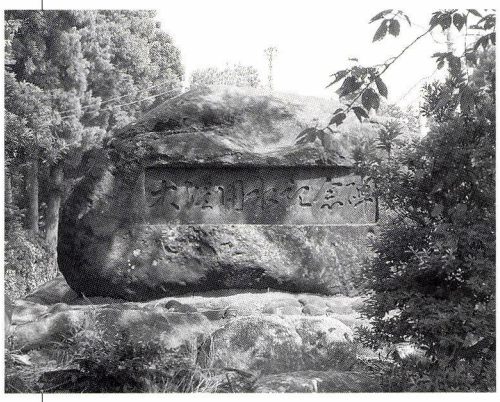
彼の考えは、関川における農業用水と水力発電の共存共栄であった。池尻川発電所、板倉発電所は、その典型といえよう。一生を関川電源開発に捧げた上越の電力の父は、昭和三五年、八十年の生涯を高田に終えた。

昭和二六年、高田市初の名誉市民となる。

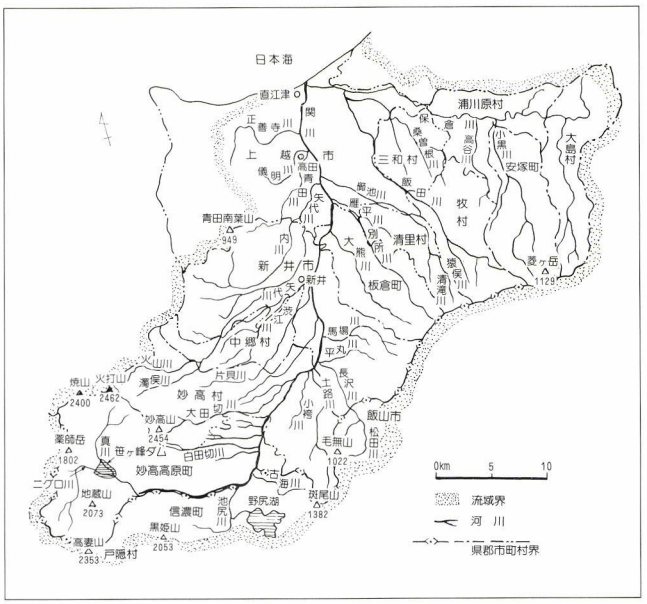




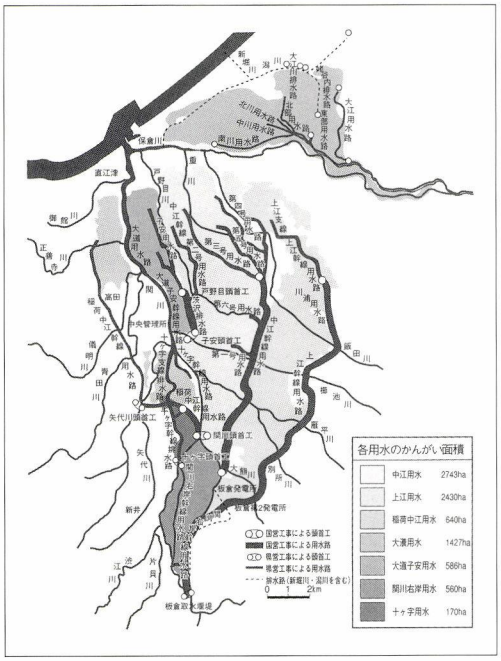
旧高田図書館跡地に建つ国友末蔵の胸像と蔵々発電所に使われた東芝電気製の発電機



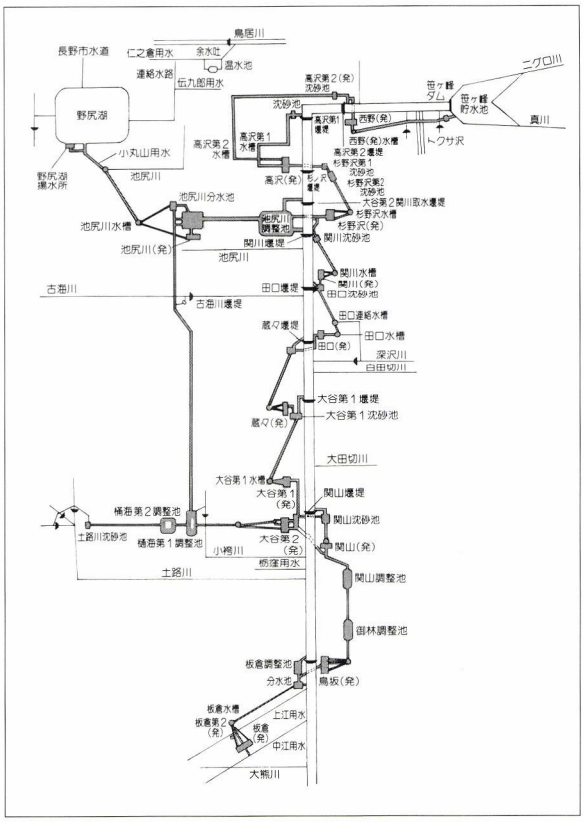
大濱用水記念碑



関川水系図



高田平野の用水路



関川水系の発電系統図



上江用水の旧取入れ口

母なる川、関川の再生を

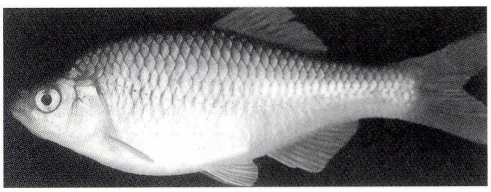
濁川明男　にごりかわあきお

「蕩々と流れる関川」、関川の河口付近は常に満々と水を湛え、ゆったりとして、まさに大河のような重圧を感じさせ、美空ひばりの「川の流れのように」を口ずさみたくなるような心境にさえなる。人々が川と疎遠になって約四十年近くが経過する。現在では護岸を朝夕散歩する人の姿こそあるが、川辺で遊ぶ子どもの姿は全く見られなくなった。

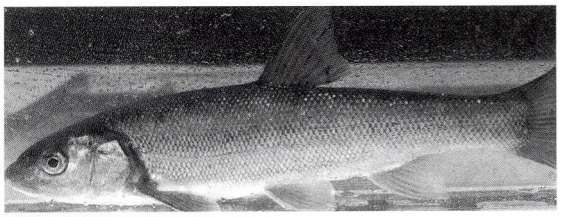
昭和三十年代半ば頃までであったろうか。人々は河川で洗濯したり、野菜を洗ったり、風呂水にも利用したりしていて、河川は私たちの生活の一部であった。大人も子どもも釣りや雑魚捕りに興じた。浮き釣り、チャッポン釣り、カニ釣り、ナマズ釣りと、釣りにも様々な方法があり、秘技は大人から子どもへと引き継がれてきた。秋の堰払いは恒例行事で、ふんどしを着けて弓だもを手に、濁水の中を大川に下る魚を捕獲した。中・上流ではカジカやマス、ウグイをねらって水に潜った。小河川では「水換え」という楽しい雑魚捕りもあった。小河川の落差のある所には淵が形成される。秋になって農業用水の送水が止まると、子どもたちは家のザルを持ち出し淵に集まる。下流側に泥で堤をつくって仕切り、淵の水を下流にかい出していく。水位の低下とともに護岸のそだの間や穴の中から次々と雑魚が飛び出してきて、泥水で呼吸が苦しくなると水面でパクパクと呼吸を始める。それらを一網打尽に捕らえた。当時の河川は人々の貴重なタンパク源でもあったのである。

昭和三十二年であったろうか。パラチオンやホリドールといった極めて強い農薬が散布され、多くの魚が浮上して川を流れ、河川の生態系は一変した。それによって、河川の魚相は貧弱になり、特に田んぼ周辺ならどこでも見られたナマズが完全に姿を消した。化学肥料の登場によって畑から肥溜めが消え、バキュームカーが生の糞尿を河川に垂れ流し、川原の柳の枝には新聞紙が貼り付いて目を覆うばかりとなった。続いて、全国的な公害問題の発生、消費社会の到来と石油化学製品の登場によって、河川は投棄によるゴミ捨て場へと変貌していった。農薬による背骨の曲がったウグイはどこでも見られるようになった。工場排水のみならず洗剤等を含む生活雑排水の流入によって、河川の水質はさらに悪化の一途をたどった。パワーショベルで破砕した住宅廃材を川原で燃やす光景、養豚場の

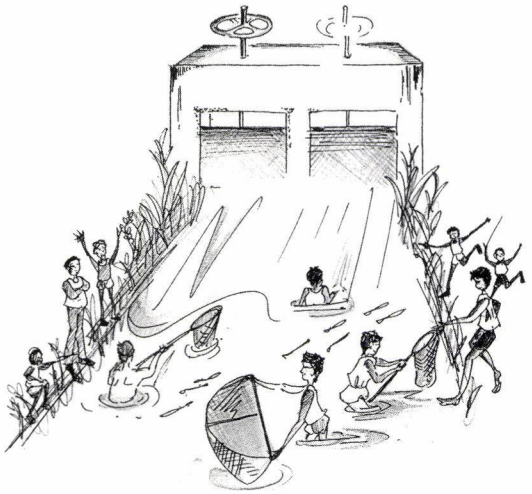




タナゴ



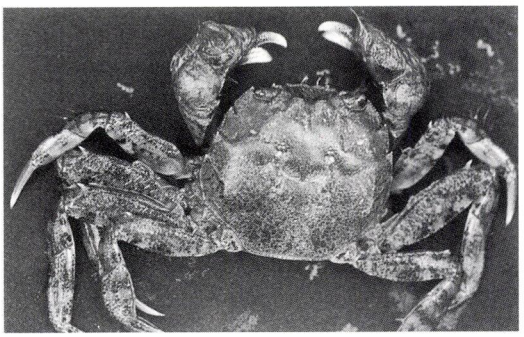
ウグイ



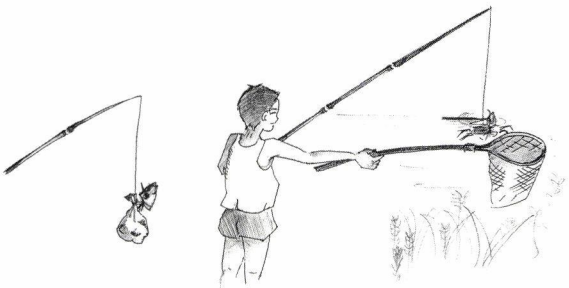
堰払い



水換え



モクズガニ



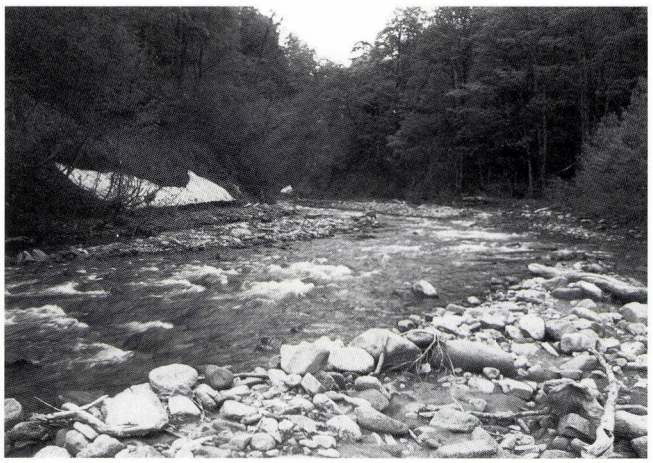


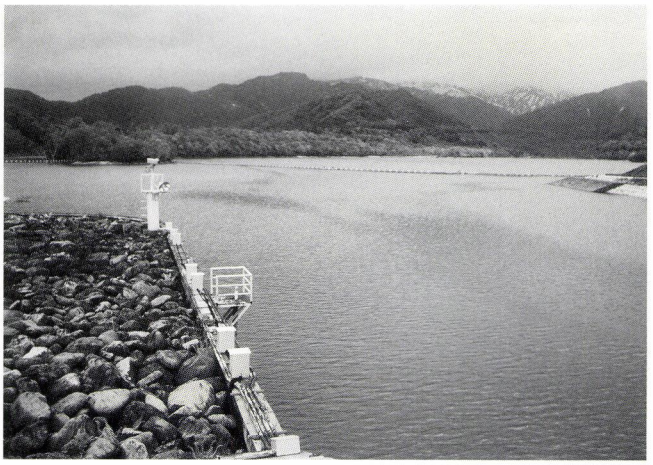
イラスト／大町小学校　東條周子氏

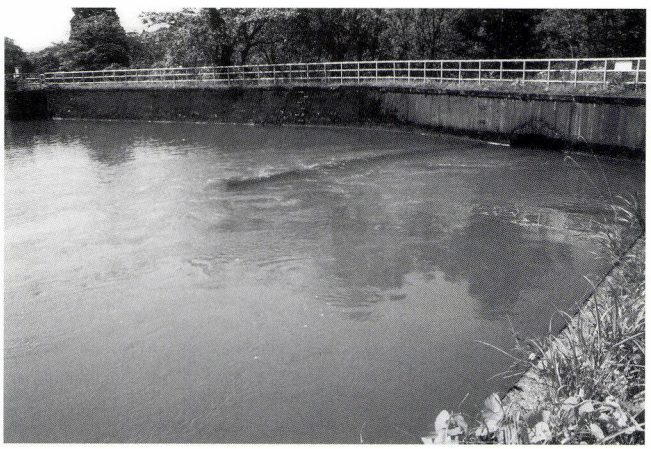
糞尿が水とともに河川に排水されるのも幾度か目撃した。タイヤやバッテリーなどの投棄も目に余った。私たちは豊かさの代償として、河川を犠牲にしてきたのである。そこには「水に流す」という言葉のとおり、「自分の身辺のみ一時的にきれいになればよい」とする身勝手な論理が私たちを支配していた。「最近の子どもは自然の中で遊ばない」と大人は嘆くが、子どもたちから森や川という自然を奪ってきた歴史がある。七・一一水害後、改修された河川敷には親水目的で花壇やモニュメントが設けられたが、訪れる人もなく、草が生い茂っている光景に、何か一抹の寂しさを感じるのは私だけであろうか。

焼却炉からのダイオキシンの発生、産業廃棄物や最終処分ゴミが県境を越えて投棄されている事実がマスコミで大きく取り上げられ、社会的に大問題となった。そして、国際的にも環境問題への取組が動き始め、はじめて日本も重い腰を上げた。すなわち、ゴミの分別回収などに始まる日本の環境への取組は、まだ十年前後という歳月しか経過していないのである。とは言え、日は浅いながらも河川へのゴミ投棄は確実に減少してきている。下水道工事の進捗によって、年々河川水質も改善されつつある。が、まだ安心して河川魚を食するまでには至っていない。更なる下水道の完備と流域の企業努力が待たれる。

上信越高原国立公園内にある笹ヶ峰ダム、そこには関川の源流である真川、ニグロ川、黒沢川が流れ込んでいる。これらの源流での夏の水遊びは最高である。透明度と言い、水温十三度前後という冷たさは訪問者を魅了する。清流と触れ合い、その後はロックフィルダムである笹ヶ峰ダムの見学というのが定番であろう。しかし、夏場に幾度となく多くの人をダムに案内するが、誰も気づかないことがある。それは、水門が閉ざされていてダム下に水が流下していないことである。「湖に流入していたあの三つの川の水はどこへ？」と問いただして、「そう言われればそうだね」と初めて気づく。ほとんどの人は、渇水に備えダムは水を溜めていて、順次、上流から下流へと水が流れ下っているものと思っている。ダム湖の水は、ダム横の入口から山中の隧道を流れて西野発電所の発電水に利用されているのである。発電後の水は関川本流の水とともに再び隧道に導かれ、高澤発電所に送水さ



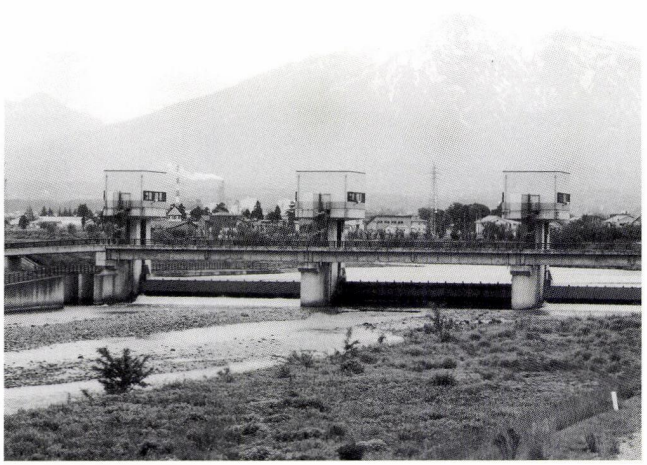




上　関川の源流の１つ ニグロ川
中　笹ヶ峰ダム　乙見湖
下　山中を流れる水（鳥坂発電所調整池）



水を満々とたたえる関川河口



新井市広島地区の取水堰

れる。その後、杉野沢発電所、関川発電所、田口発電所、蔵々発電所、大谷発電所、関山発電所、鳥坂発電所へと次々と河川水を加えて水量を増加し利用されているのである。まさに、「関川の本流は山中にあり」なのである。鳥坂での発電後の水は、その一部を上江用水に供給され、残りは板倉発電所に導びかれる。板倉での発電後の水の多くは中江用水に供給され残水は関川に戻される。しかし、それも数百メートル下手の広島取水堰で関川本流の水とともに左岸の農業用水へと導かれる。また、稲田橋下流には工業用水のための取水堰も存在する。平野を潤した水と残水は、飯田川や大瀬川、保倉川等の河川に流下して関川に戻される。それによって、蕩々とした河口域の流れが生み出されるのである。大正時代から信州や頸南の工場を支えてきた発電であり、高田平野の水田を潤す大切な農業用水ではあるが、関川の利水のしくみを知ると、「蕩々と流れる母なる川」というイメージは吹き飛んでしまう。

二十一世紀は水の戦争の時代と言われている。水の惑星と呼ばれる地球だが、河川水は、地球の全水の一万分の一にしかすぎない。熱帯地方での干ばつによる食糧危機、何十万人という難民が国境を越えて水と食料の支援を待つ国内紛争の多発、一年に日本の国土の四分の一の面積に相当する森が姿を消していっている森林破壊、温暖化にともなって拡大する砂漠、モンスーン気候下でも発生する異常渇水と局地的豪雨、洪水など、地球規模で異常気象と水不足が深刻化しつつある。水豊かな私たちのこの郷土でさえ、生活用水の確保が容易ではなくなってきている。

母なる関川、そこには十分に回復していない水質汚染問題、瀬と淵のない水辺環境、取水堰による河川生態系問題、生活用水として取水できない歴史的な水利権問題など課題は多い。雪解け期や豪雨時には、確かに濁水が渦巻いて流下する。しかし、集中的にいくら雨が降っても総利水量を越える水は利用できない。要は渇水期の夏場にどれだけ河川水が確保されるかにある。それは上流域の豊かな森と山岳の残雪、夏の降雨によってのみもたらされるものである。神頼みという部分は多いが、節水や雨水の有効利用、そして、活力ある森の再生のための保全活動なら私たちにも努力できることである。また、子どもたちが遊べる水辺空間の復元には、一定の流量確保と水質改善がどうしても必要である。そのためには、市民レベルでの水辺環境保全運動が流域各地で展開され、水に対する市民意識が高まっていくことが不可欠なように私には思えるのである。

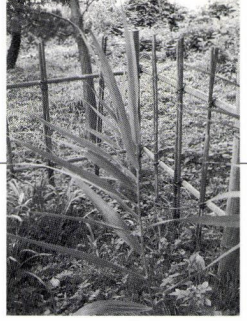
筆者／上越教育大学教授

カメラの眼

念仏停止という法然上人一門への弾圧によって、承元元年（一二〇七）の早春、弟子の俗名藤井善信（よしざね）、親鸞聖人が配流の地越後国府の居多ケ浜に立ってから、まもなく八〇〇年（二〇〇七）になる。

浄土真宗発祥の地として、居多ケ浜から五智周辺は、国府別院・光源寺・五智国分寺・居多神社など数々の旧跡に訪れる人は絶え無い。そして聖人を追慕する人たちの、いろいろな記念碑が建てられている。

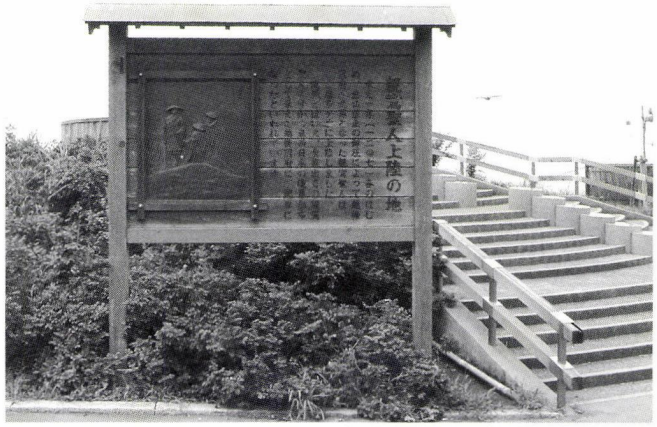
〈カメラの眼〉で居多周辺のモニュメントを覗いてみよう。



追慕の碑（いしぶみ）



親鸞上陸の地のとする古い絵はがきには、砂丘に半分埋まるようにして「親鸞聖人御上陸之地　居多ヶ濱」の石柱が写っている。この記念碑が上陸の地を示す最初のものと思われる。滋賀県彦根市鳥居本町（碑には近江国鳥居本村）の寺村友左衛門という人が大正15年に建立したものである。

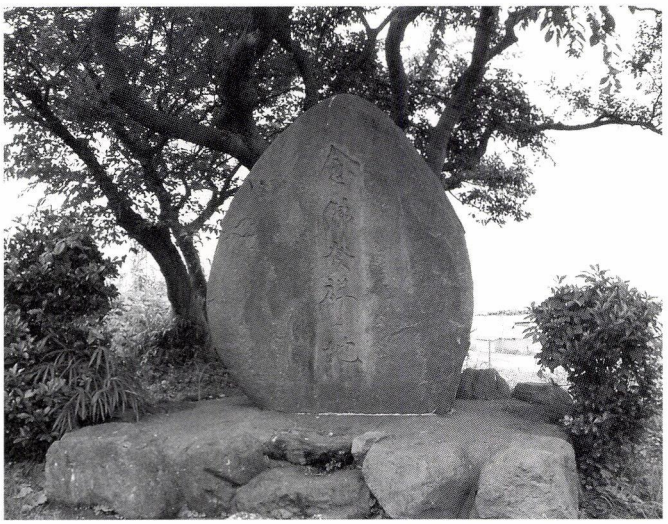


現在上陸の地の説明板にはめ込まれている銅製のレリーフは、かつては衝立のような立派な石にはめ込まれ、上陸の地のシンボルともいえるものであった。

画家中沢弘光が、佐々木月樵の『親鸞聖人伝』に触発されて、居多の浜で描いた「遠流」を明治44年の650回御遠忌に再び描いたものが原画となった。聖人の傍らにいる人物は性信房と西仏房だといわれている。いつ、どのようにして建てられたかはっきりしていない。

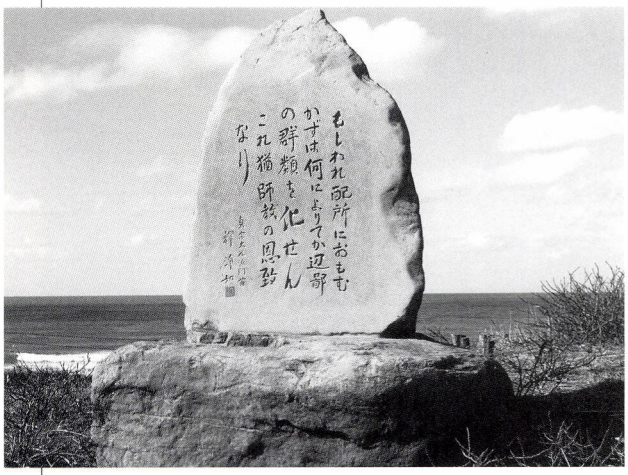


夢殿に倣って建てられた八角の見真堂は、市内の林正寺の檀信徒によって昭和46年に建立された。



「念仏発祥之地」と刻まれた碑は、市内の貝川氏の懇願により、金子大栄師（真宗学者・市内西賢寺出身）が揮毫し、平成元年建立された。

親鸞聖人上陸の地を巡る



展望台の横に、日本海を背にして建つ一番新しい碑は、直江津ロータリークラブ40周年を記念して、平成11年に建てられた。東本願寺大谷門首の書。「御伝抄」の一節「もしわれ配所におもむかずは……」が刻まれている。





国分寺境内にある聖人の旅姿の像は、宝塚市の広瀬精一氏が昭和12年に建立。その傍らに、句仏上人（東本願寺23世彰如）の「御配所　我泣く夜半を郭公」の句碑がある

氏は大坂の産業界の人であったが、身内の不幸に遭遇して発心、各地に仏像などを寄贈している。見真堂の聖人坐像や額も氏の寄贈である。また、上陸の地に碑や自ら詠んだ歌碑も建てている。

自然の魅力豊かな五智公園に出かけよう

■古澤良彰　ふるさわよしあき





春、南の国から安定した繁殖地を求めて長旅をしてきた小鳥たちには、名立の岬を越えると大きく広がる直江津の湾と高田平野が見えてくる。そして、眼下には新緑の森がある。これから危険な平野を飛ぶ前に、まずは緑の森に静かに下りて一休みしよう。そこが五智公園である。緑の雑木林は小鳥たちの休養の場である。この森は、つい先日、大きな群れのアトリやツグミがシベリアへ向けて旅だった森である。秋、長い日本海横断の旅を乗りきった小鳥の群れが羽を休め、体力を整えるのもこの森である。

五智公園は上越市の市街地に近く、市民が身近に触れ合うことができる公園である。特に自然公園のエリアでは、里山の四季折々の景観と整備された遊歩道が、いつでも市民を

迎え入れ、この公園を訪れた人々の心にゆとりと元気を引き出してくれる。また、五智公園は歴史・文化のエリアをもつ。複数の神社仏閣があり、青少年文化センターなどの文化施設もあり、市民のニーズに合った憩いのフィールドとしての多くの要素を備えている。

そこで、五智公園がより多くの市民に親しまれるとともにその良さが理解され、さらに自然公園として整備・保全されることを願い、現在の公園の姿を一部紹介する。

五智公園の大地や地理的環境

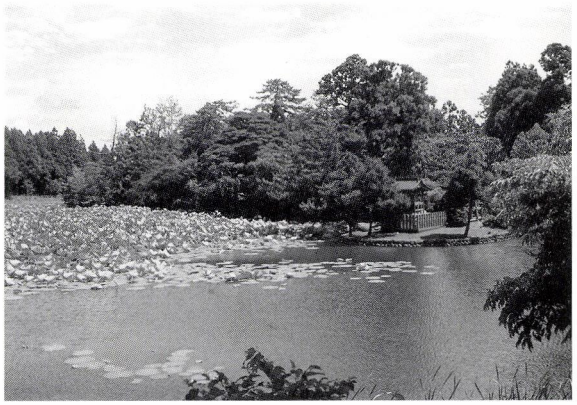
高田平野の西部には、火打山～南葉山と続く背斜構造の地層が南北にあり、日本海に沈んでいる。この山地の端に五智公園があり、標高１００メートル弱の展望台山や愛宕山を中心とした地域である。この地層は、屏風谷の露頭に見られるように貝の化石や亜炭層があり、浅い海で堆積した海成層である。五智から直江津海岸へはこの地層の上に古砂丘、更に新砂丘が重なってている。

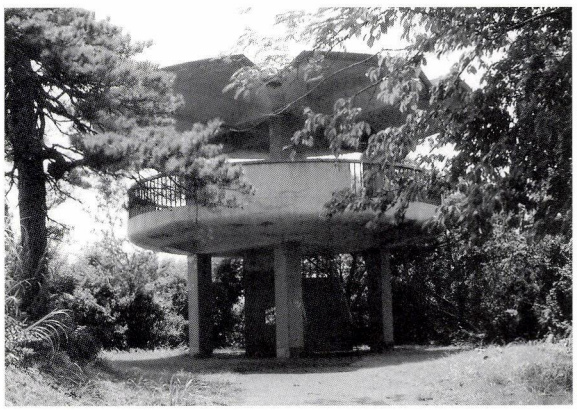
五智公園は、海、海岸、砂丘、地層の見える露頭、性質の異なる五つの人工池、小川、草原・芝生広場、アカマツ林、コナラ林（落葉広葉樹林）、丘・山と多様な自然環境をもつ公園である。また、神社、寺院、歴史の地、展望台、遊歩道、ちびっこ広場、交通公園、青少年文化センター、キャンプ場、蓮池公園など多目的に活用できる総合公園である。

五智公園の活用

五智公園の機能を生かした市民の活用は様々に広げることができる。

1、日常的に親しめ、自然散策できる公園
2、季節ごとの花や小鳥が観察できる公園
3、遠足、キャンプ、自然観察会など団体活動に対応できる公園
4、環境教育・学習の拠点として日常的に活用できる公園
5、青少年の研修・学習の広場、エコミュージアムとしての公園
6、市民のボランティア等の研修フィールドとしての公園
7、市民のイベント会場としての公園





上　五智公園蓮池
下　展望台

五智公園の植生

五智公園の植生は、暖流である日本海の影響を大きく受けて、暖地性のヤブツバキクラス域に入るが、多雪地の特性から北のブナクラス域の植物も多く混入している。

ヤブツバキクラス域の植物では、ヤブツバキ、ウラジロガシ、シロダモ、タブ、カラスザンショウなどがあり、ブナクラス域の植物ではオオバクロモジ、オオカメノキ、ユキツバキなどがある。

四季折々に目立つ植物

五智公園には、約４００種ほどの植物が生育しており、四季折々の草木の花、や緑、紅葉などを楽しむことができる。

◆早春に見られる花

五智公園の早春、雪解けが待ちきれないように、林床一面に小さな白い花をつけるのが

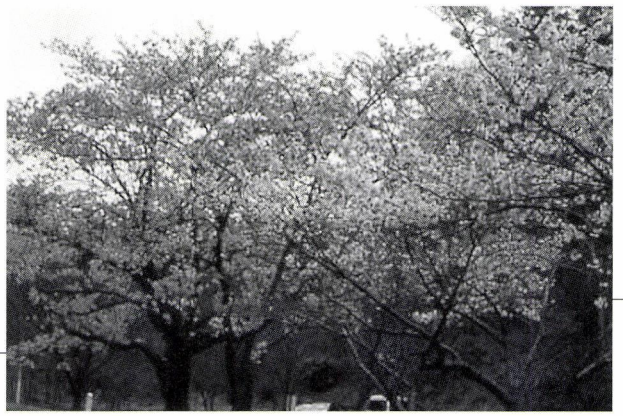
五智公園を彩る花



ミズバショウ



ササユリ



八重ザクラ

オウレンである。噛むととても苦い黄色い根を持つ薬草である。まだ、コナラなどの雑木林の芽吹きの前に咲く草花で、オウレンに続いてピンクの花のカタクリ、キクザキイチゲなど順次開花し、訪れる人を迎えてくれる。早春の草花には、スプリングエフェメラルともよばれ結実後地上部は枯れて眠りにつく植物もある。また、樹木では、春にまず咲く花マンサクがある。黄色の小さな花を枝一杯に付け、秋の豊年満作を願って名付けたとも言われる。日本海側のマンサクはマルバマンサクである。

次に開花するのがオクチョウジザクラで樹高の低いサクラである。サクラ類は続いてヒガンザクラ、ソメイヨシノザクラ、ヤマザクラ、カスミザクラ、サトザクラ（八重ザクラ）、ウワミズザクラと順次開花する。カスミザクラの開花時期から公園全体の樹木がそれぞれ個性的な色合いの芽吹きを始め、新緑の季節を迎える。早春を飾る花を幾つか挙げてみる。

草花ではカタクリ、オウレン、キクザキイチゲ、タチツボスミレ、マキノスミレ、ナガハシスミレ、クビキカンアオイ、エゾタンポポ、セイヨウタンポポ、オオイワカガミなど。

早春に見られる木の花では、マルバマンサク、オクチョウジザクラ、ユキバタツバキ、ヤブツバキなどである。

◆春に見られる花

五智公園の春を飾る花にツバキがある。その多くが背が低く株立ちして多くの花を付ける（ユキツバキの特性）ユキバタツバキである。ユキバタツバキの花はヤブツバキの特徴を持



クルマユリ

ヤマユリ





コオニユリ

ち、ユキツバキとの自然雑種と考えられる。

五智公園のメーン道路は八重ザクラロードである。800本ほどのサトザクラが植栽され、「みどりの日」前後は八重ザクラが満開となり公園は最も華やかな季節となる。上越市の「緑のフェステバル」会場としても利用されている。

五智公園のおもな春の花には、エゾタンポポ、ツボスミレ、ユキグニミツバツツジ、ミズバショウ、オオカメノキ、ヤマザクラ、カスミザクラ、サトザクラ、ウワミズザクラ、ミヤマガマズミ、ヒメハギ、ウラジロヨウラク、ニガナなどが見られる。

◆初夏に見られる花

五智公園の湿地には、多くの大切な植物が生育している。

カキツバタ、ノハナショウブ、モウセンゴケ、オオバギボシ、コバギボウシ、オオニガナ、ミズバショウ、ミズゴケなどである。

初夏の花としては、ササユリ、ヤマユリ、クルマユリ、エゴノキ、ホオノキ、ミズキ、ナツツバキ、ウゴツクバネウツギ、タニウツギ、ヤマツツジなどが見られる。最近特に市民団体が保護活動を進めているが、公園内のササユリ、ヤマユリ、クルマユリを採取する人が目立ち、いずれも激減している。ササユリは西日本に生育し、上越地域が北限となる。ヤマユリは東日本に生育し、上越地域までが生育地である。クルマユリは高山植物であるが、多雪地のため珍しく五智公園まで下りてきている。この貴重な植物の採取はやめて、多くの人が楽しむ対象としよう。





上　愛宕神社の大杉
下　五智国分寺の大ケヤキ

◆夏に見られる花

リョウブ、コシアブラ、タラノキ、コバギボウシ、ホツツジ、キキョウ、ヒヨドリバナ、クズ、ゲンノショウコ、オトコエシ、コオニユリ。

◆秋に見られる花

ホツツジ、キキョウ、センブリ、ヒヨドリバナ、ミヤママコナ、ヤクシソウ、アキノキリンソウ、オオニガナなどであるが、近年激減したのがセンブリである。薬草として採取する人があり、公園内の採取は控えてほしい。また、オオニガナは絶滅危惧種になっている植物である。

◆冬の雪に耐える常緑植物

五智公園には、南の常緑植物が多雪地に適応して生育している植物があり、ヒメアオキ、エゾユズリハ、ユキバタツバキ、ヒサカキなどは、背丈が低く、茎が柔軟で、積雪に耐え、また、雪の布団につつまれて寒気から守られ、生育している。

◆五智公園で見られる大きな樹木

五智公園のエリアには、愛宕神社の大スギと国分寺の大ケヤキがある。特に愛宕神社の大スギは、その大木にコナラ、ヤマウルシ、ムラサキシキブ、ノブドウ、ツタ、シダ類などの植物とヤマトミツバチ、キイロスズメバチを住まわせ、また、ムササビ、フクロウ、コミミズクの宿も提供する生き物たちの大宿となっている。

五智公園の鳥・虫

◆五智公園を訪れる野鳥

五智公園の野鳥は、留鳥以外に多くの旅鳥や、子育てに訪れる野鳥も多い。

留鳥・漂鳥　ホオジロ、スズメ、ウグイス、カワラヒワ、シジュウカラ、ヤマガラ、ハクセキレイ、ミサゴ、トビ、ハシブトカラス、ウソ、ハシボソカラス、モズ、カルガモ、コサギ、ダイサギ、ゴイサギ、メジロ、ヒヨドリ、カケス、アカゲラ、ムクドリ、カワセミなど

夏鳥　オオルリ、キビタキ、クロツグミ、アカハラ、オオヨシキリ、コムクドリ、フクロウ、コミミズク、カイツムリ、バン、ツバメ



コナラの枯れ

など。

冬鳥　コガモ、カモ、ツグミ、ジョウビタキ、エナガ、マヒワなど。

◆五智公園の昆虫

蝶類　アオスジアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、キアゲハ、アゲハチョウ、ギフチョウ、アカタテハ、キタテハ、ルリタテハ、オオムラサキ、コムラサキ、ミドリヒョウモン、ミドリシジミ、オオミドリシジミなど。

とんぼ類　オニヤンマ、クロスジギンヤンマ、ウチワヤンマ、ギンヤンマ、オオヤマトンボ、オオルリボシヤンマ、ショウジョウトンボ、コフキトンボ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、ノシメトンボ、アキアカネ、コシアキトンボ、アオイトトンボ、オオアオイトトンボ、チョウトンボなど。

自然を守ろう

◆荒れていく森林

五智公園は、かつては地域や神社、寺院の大切な里山であり薪、木炭採取や草刈場であり、山の幸の豊な林であった。愛宕山には茶店もあり、里山は住民に身近な存在であった。しかし、多くの里山はエネルギー革命の中で放置され、荒れた藪山へと変わり、地球温暖化の中でマツクイムシ、カシノナガキクイムシの北上、酸性雨の追い討ちにあい、急速にマツ枯れ、ナラ枯れが進んでいる。

五智公園は早期に公園化され、整備されてきたが、マツ枯れ、ナラ枯れは進み、植栽の八重ザクラもコスカシバの食害とナラタケ菌の害により多くが寿命を終えようとしている。

◆失われやすい自然

五智公園には、絶滅危惧種の植物や、地域的に見ても貴重な植物が生育しているが、山の老化と荒れ、入園者の心無い採取、池の放置や水枯れなどにより、人手を入れた整備・保全活動を必要としている。

◆公園を守り育てる活動

現在、市行政の公園整備の他に、環境ＮＰＯエコトピア上越、五智公園を育てる会などが公園の保全活動や、サクラの植栽活動を実施している。しかし、ボランティア参加者の高齢化と減少の中で、手入れが荒れに追いつかないのが現状である。

◆五智公園の魅力を次の世代へ

魅力ある五智公園、エコミュージアムとしての公園、豊なビオトープの公園、として適正な整備がすすみ、魅力ある公園を次世代に贈るためには、その青写真作りが急がれる。この、確かな青写真があって、始めて保全活動としての手入れの仕方が確定するからである。五智公園が、地域に住む小鳥だけでなく、渡り鳥も安心して羽を休めるような公園であってほしい。そして、上越市民として、身近な自然公園を魅力ある公園として、次世代に贈るよう努力しよう。

筆者／エコトピア上越理事長

ひろば

妙高・池の平温泉開発の恩人
星野 錫 翁

●星野達雄　ほしのたつお



星野錫（「妙高区史」より）

妙高の峰天そそりて、四方の仰望を集むるが中に、二つの温泉湧出す。一を湯元と呼び、他を赤倉湯と称し、元湯は蚤（つと）に赤倉温泉として、近年山麓に鉄道の通ずるに及び、里人更に田口駅附近に赤倉温泉を分ち導かんと欲し、林野一万五千坪を寄附して之を東京の星野君に謀る。君其の計画を賛し、自ら主となりて資本金五万円の赤倉湯株式会社を起し、君推されて取締役会長となるに明治四十三年なり、後大正十一年資本金を三十万円に増加し、山腹の池の平に林野二十万坪を求めて、このたび赤倉分湯を導き、妙高と池の平とに分ち、会社の名を妙高温泉土地と改む。君は依然取締役会長たり、当時君たわむれて曰く。越後から江戸へ米搗に来るは昔の事なり、今余は頼まれて湯屋の番頭となるべく、東京から越後へ来たりと。此地方古来積雪深く、里俗は其間無為蟄居を常とせしが、今（なまた）ま、スキーの技開け、妙高山腹の地勢最も其の技に適せりとて、里人等スキー倶楽部を起し、君を戴いて会長となす。既にして妙高スキー場の名、全国に高く、温泉と相待ちて、終歳遊客の輻輳を見る。此に於いて、君は更に自ら土地一万坪を寄付して公園に供し、其の繁栄を助けたり、あわれ妙高池の平に於ける昔時未墾の林野、今や一変して楼閣簇立の勝区となれるは一に君の力とす。

茲に有志相謀り、碑を立て、君の功績を不朽に伝えんと欲し、文を余に嘱す、是れ余の甚だ此地を愛して、夏海に来たり浴し、且つ多年君と相知るに由る。余君が遺徳の妙高の奇峰と相並びて長へに子孫万衆に仰がるべきを信じ、悦びて其の由来を記すといふ。

昭和八年癸酉十月

水哉　坪谷善四郎　撰〈2〉

沈鐘　竹内　忠雄　書

星野公園

JR妙高高原駅から立ち登る県道と国道18号線の交差点近く右側に、星野公園の看板が立っている。それは地名から生まれた名称でなく、星野錫という人が用地一万坪を当時の名香山村〈1〉に寄付したことに由来する。

公園内の壮大な頌徳碑の文章は文語体で句読点も改行もないので読みづらい。そこで『名香山村史』によって読むことにする。

星野錫翁頌徳之碑

枢密顧問官正二位勲一等伯爵

伊藤己代治篆額

錫の生い立ち

星野錫は安政元年（一八五四）十二月二十六日、姫路藩士星野乾八・けいの五男一女の長男として江戸の巣鴨で生まれた。幼名を錫一郎といったが、長じて藩学校に学び錫と改めた。

「錫」の読み方については『星野錫翁伝』（昭和十年発行）には何も明記されていない。「錫（しゃく）」（『越佐人物誌』中巻）、また『わたしたちの妙高高原町』は「錫（すず）」とふりがながついている。『岩波漢語辞典』によると、「錫杖（しゃくじょう）の略。僧・修験者が持ち歩く杖」とあるから「しゃく」とふりがなしたのもうなずける。だが、「あきら」とは、何からとったものか、明らかでない。

先の『伝記』中に、澁沢栄一が星野宛に打った電報には「ホシノシヨウ」となっていて、文面は「コンニチキカヲセイトウカイシャトリシマリヤクニセンキョシタゼヒゴショダクアリタシ」とあり、消印は明治四十二年が黒く汚れていて判然としないが、日時は四月二七日と読める。これによって「錫」は「ショウ」と発音されていたことがわかる。

錫一郎誕生の安政元年は、正月にペリー提督が軍艦七隻を率い再び神奈川沖に来泊、三月にはロシアのプーチャーチンが長崎に再来、それぞれ国交を求めて政情は大きく揺れていた。

姫路藩でも藩が二つに割れて混乱し、重役たちは藩主を若い嗣子と交替させて政局を乗り越えた。父星野乾八は前藩主を支持していたので、明

治維新を迎え、国元に隠遁せざるを得ず、おちぶれた生活を余儀なくされ、錫一郎は十五、六歳まで、東京府下の農家に身を寄せて、なんとか暮らしを立てていた。

明治初年、開港場横浜は東京の玄関口として新しい気風が充ちていた。明治六年（一八七三）、二十歳の若者錫一郎は横浜に出て、アメリカ人の経営する活版印刷業景締社に入社。活版印刷に関する一切の技術を修得。また、簿記帳罫引の技術を独習した。

東京に出ての大仕事

明治七年（一八七四）四月、景締社は王子製紙会社に買収され、横浜抄紙会社と改称する。

この年の暮、紙幣寮より司法省で発行の訴訟用並に裁許用罫紙、約三千万枚（全部美濃半紙）の印刷の下命があった。直ちに日本橋兜町に工場を設け、錫はこの仕事に就くため東京に移る。彼にとって、最初の大仕事であった。

当時は印刷機械も一、二台あるに過ぎず、専門の職工もおらぬに等しい時代であったので、急ぎ人を養成、昼夜兼行、能率の上がる印刷法を考え、期日までに完成し納品した。

簿記の普及に伴う罫紙の需要が増え、新たに東京抄紙分社と名付けて、印刷製本の営業を開始することになった。創業に際して、注文、会計、印刷、校正、その他一切の事務をとりしきった錫は、景締社に入社より僅か一年余のうちに、早くも社の重要人物となった。

この頃、同社に立派な一人の紳士が訪ねて来て「星野錫という人がいますか」「ハッおります」「明朝第一銀行まで来る様に伝えてくれませんか」といって、その紳士はおもむろに立ち去った。誰あろう、当時第一銀行頭取の渋沢栄一子爵その人であった。

一書生に過ぎぬ錫にとって、業界に名高い渋沢子爵は一大先輩であり、常に敬慕と渇仰とをもって、本社々長としての子爵に接することはあっても、一度も親しく言葉を交わしたことはなかったので、胸を高鳴らせつつ、第一銀行の門を叩いたのであった。

「私が昨日お尋ね頂きました星野でございます」

「ああ、君なら見覚えがある。この間、××省で君の評判を耳にした。悪い様にはせぬから、今後とも東京抄紙分社のために大いに尽力してもらいたい。なお、王子製紙の売捌の方も、あわせて君にやってもらいたい」

「微力ながら、お言葉に従い、一所懸命お尽し致しましょう。何分よろしくお願い申し上げます」

面会は簡単に終ったが、この日から錫は渋沢の一子分となった。錫の養嗣子が渋沢子爵の息子である事を思えば、その後の私生活においても、両者の間に浅からざる交わりがあったと考えられる。

明治十九年（一八八六）十一月、錫は三十三歳、浦野耕叟次女さよと結婚する。

米国留学

明治二十年（一八八七）七月、印刷製本および彫刻に関する調査研究のため、王子製紙会社より米国へ二ヵ年間留学を命ぜられる。

マサチューセッツ州のホリヨーク市は河川を利用して水力で機械を動かし、既に工業地として著名な新都市であった。錫はそこに下宿し、昼間はトランスクリプト新聞印刷所の視察研究、夜間は、英語を学ぶことに費した。ホリヨークでの視察を終えた錫は、いよいよニューヨークへ出る。著名な印刷所に通い、印刷、製本を研究、またアートタイプ（コロタイプ）と称する写真版を習得すべく、発明家E・G・ビースタートの印刷所へ通い、夫妻を始め二人の愛娘や写真技師のリズコ、印刷技師のウィルソンらから敬愛され、楽しい日夜を過した。

大正十年（一九二一）の秋、ジュネーブで開催された第三回国際労働総会に使用者代表委員顧問として三度目の洋行した時も、帰途米国へ渡り、二回目と同じく写真技師のリズコと会い旧交をあたためている。

事務員に初めて女性採用

錫が初めて米国に上陸した時、米国は独立百年祭に当り、全土を挙げて盛大な祝賀が行われていた。当時の米国の文化百般にわたる顕著な進歩は、独り男子によってのみ遂げられたものではない。そこには女子の協力があったことを痛感して帰国した。

我が国の婦人の蒙を啓き、婦人の社会的活動を促すことを帰国後の一つの重要な使命と感ずるようになった彼は、東京製紙分社々長となるや、直ちに女子を社員として採用した。

明治二十四年（一八九一）五月、新たに女子五名を採用し、自ら彼女らに簿記帳の記入法を教え、また、算盤（ソロバン）も教えた。第一銀行で男子と競争させたところ、女子軍が優勝したので、錫は我が意を得たとばかり多大の満足を味わった。

今日、女性の社会進出はめざましいものがあるが、当初は世間から嘲笑されもしたが、錫の先見の明を賞讃するより外にない。

昭和二年十二月、日本婦人海外協会。昭和五年五月、日本婦人の地位向上、婦人の政治的進出による社会改善を目指し、婦人同志会を創立。また、一般住民の生活改善のために衛生婦人会を誕生させている。

また大正十二年自ら後援者となって翠紅会を組織し、日本美術の向上普及のためにも尽している。





上　妙高温泉街
下　星野公園

財界の人格者

錫は明治末期から昭和初期まで実業界の代表者の一人として、明治四十年（一九〇七）東京商業会議所（現商工会議所）の副会頭となり、広範囲に亘って活動し、経営不振に陥った多数の会社の立直しに腕を振った。その結果、三〇社にもおよぶ会社の役員として経営に参画した。それは旺盛なる事業欲を持っていたためではなく、そのほとんどが依頼されて就任したものであった。このことは、公園の頌徳碑の「余は頼まれて湯屋の番頭となるべく東京より越後に来たれり」という彼の言葉を見ても明白である。

また、大正元年（一九一二）衆議院議員に、大正四年（一九一五）には東京市会議員となった。通常市会議員を経験してから衆議院議員に出馬するのが常道であるが、彼は全く政治的野心を持たず、ただ実業界の代表として推されて、議席を占めたに過ぎなかったのである。

常に日本の経済界全体のことを考えて行動していた偉大なる人物であり、正に「資性温雅にして長者の風あり、財界の人格者」〈3〉であった。

妙高温泉の開湯、池の平の開発、星野公園の開設もその活動のいわば副産物であった。

昭和九年（一九三四）二月九日、東京・日本橋の実業連合館五階講堂において、感謝会主催の許に「星野錫翁壽像」除幕式が盛大に行われた。また、同年十一月十一日、日本橋区五の部町会連合会主催の感謝会でも、邸宅後方の末広神社境内において「星野翁の壽像」除幕式が行われた。

同年六月二一日、帝都復興事業に尽した功により、勲三等瑞宝章を贈られている。

頌徳碑が建立されて五年後の昭和十三年（一九三八）八十五歳の天寿を全うされた。

星野錫翁に聴く——「東京青年」誌上で——

東京ＹＭＣＡ〈4〉の機関誌「東京青年」の昭和九年十月号に「実業界の元老にきく」という座談会の記事を発見した時の筆者の悦びはたとえようがなかった。そのリード文に言う「九月十一日今秋第一回のＹ・Ｂの会員、あの元気な翁を迎えて青年実業家二六名が問いつ語りつ一夕を過した」。

私は今年八十一歳になる。この頃、毎日のやうに必ず一人や、二人に「お歳に似はずお元気だ」とか、「どう見ても八十を越してゐるとは見えない」とか言はれるので、成程、長生してゐると気付いたわけで、二、三年前までは、年齢などに頓着しなかったものである。

＊

人生、何がよいかと言って、長生き位よいものはない、と私は思ってゐる。殊に、近頃の様な面白い世の中になって来ては、尚更らである。私はもう二十年、百歳まで生きるつもりだ。どうか、見とどけて下さい。

＊

十四歳の暮、はじめて、親に連れられて姫路の田舎から出て来て、横浜のさる活版所に奉公したのが、私の実業についた始まり、明治五年のことだ。その時の月給が金五円、それからずっと、月五十銭位づゝ、増給された。

＊

仕事は、お役所の係が主で、今の王子製紙本社との間を終日駆け廻ったものである。後には新聞社の用紙も引受けた。

新聞の発展し出したのは西南の役の報道の為で、それこそ飛ぶやうに賣れた。だから私は政府、新聞社と言ふ大事業の間にあって、比較的早くから社会の第一線に立って働いてゐたわけである。

＊

亡くなられた澁沢さんに、初めてお目にかかっ

たのも、その頃だ。主人に紹介されて「あゝ、星野か知ってる。知ってる。」と言はれたのも覚えている。これが澁沢さんと口をきいた時の最初。

＊

澁沢さんには、ずゐぶんお世話になった。手紙の書き方なども、商人の手紙はこうでなくてはならぬと、いち〳〵訂正して下さった。その頃の商人は昔の習慣、お役所で御用を聞くのに、床に下座したまゝだったが、私は商人としての気品を保つ意味から立ったまゝで御用をうかがった。これも澁沢さんに教はったことである。

＊

私が、愛国主義に身を入れたのが、二十一歳の時、以来六十年このかた、実業界のいわゆる「縁の下の力持」で以って任じてゐる。

金儲けが目的であったら、何の一千万、二千万は握ってゐたろうと思う。しかし今だに貧乏である。どうも妙な性分で、五度も六度も頼みに来られると、否やと言ふことが出来ないので、これが「それ、星野はまた引っかゝった」と言はれる所以である。然し、今年の暮あたりから、一寸大きな仕事を始める準備中であることを申し上げておきますぞ。

＊

御承知の様に、今度、アジヤ経済連盟会長と言ふことで、蘭領インド支那方面へ、貿易、販路開拓のために出掛けます。御縁があったら、また、報告をもってやって来ますよ。

通商問題についても、私はこう考へてゐる。安くていゝものは賣れるに極まってゐる。それを買はせまいと邪魔だてする必要があるかと。植民地と言へども同じ国民であってみれば、多少の利害関係は後にしても、国民の幸福を願ふのが第一であるべきだと。私は簡単にそう考へてゐる。

＊

近頃、職業婦人の活躍と言ふものは、実に目覚ましいものであったが、仕事に婦人を使い始めたのも、実は私が最初であった。私がアメリカから帰った明治二十四年以来のことである。それ以前は電話の交換手も男で、忙しくなって来ると、通話者をガナリ出す。加入者側から言へば、交換手に叱られながら電話をかけてゐたものであった。

＊

交換手について面白い思い出が一つ。名前は忘れたが、今の中央電話局、その局長さんから寄附を頼まれたことがある。何の為と言へば「実は、交換嬢慰労会で日光見物することになったが、汽車賃は別として職業婦人の創始者としての貴方にでなければ頼めないものがある……」と言ひにくそう。よく聞いて見たら、沿線の各駅に婦人用手洗所を置くと言ふことだった。その数がなんと三百八十一個所、費用が一万円と言ふことになった。何しろ昔のことだからね、はは……。

＊

飛行機について、失敗談が一つある。三十年も前のことだと思ふが、仙台に居る軍人で大尉の人から「飛行機に関する著述をしたいから、御援助を願いたい」と言って来られた。私は飛行機について何も知らなかったので、「人間が鳥の真似をする？　何んでそんな飛んでもない、げいとうが出来るものか」と一言のもとに断ってしまったことだ。これが今にして見れば実に赤面にたえぬ次第。この軍人は台湾戦争の時の勇士だった。

＊

私の好物は、天ぷら。先日花野屋の天ぷらを二十二喰べた。若い時は二十八位平気なものだった。周囲の者が、年齢が年齢だから十五以上は止せと言って呉れるが、好きなものはそうもゆかぬ。

＊

しかし酒と煙草は絶対にやらぬ。酒は元来きらひ、煙草は十年前から止めた。その時のつらさが今でも思い出される。夜半など、ふと眼ざめて、一服吸ひたくなる、別に生命に差支へないものを何故止めようなど、言ふ了見を起したものか、と随分つらかった。

これが半年つづいたね。しかし止めて見るとそれ迄、時々経験した風邪時の頭痛などサッパリと治ってしまった。煙草は最初からやらぬに限る。間食は、あればやる、無ければやらぬ。外にこれと言った養生法はとって居らぬ。

（昭九・九・一〇記文責在記者）

星野翁の生の声をきく。楽しからずやと思うのである。

筆者／東京ＹＭＣＡ名誉主事

〈注〉

〈1〉一九五五年（昭和三〇）名香山村が妙高高原村となり、翌五六年、妙高高原村と杉野沢村と合併し、妙高高原町となる。

〈2〉東京大橋図書館長坪谷善四郎は、新潟県加茂町出身の俳人で、水哉と号し、明治二六年「明治歴史」をはじめ、日清・日露の「戦争実記」等の著書がある。

史学雑誌「史蹟及び名勝天然記念物」に掲載した「妙高山麓の史蹟と天然記念物」という一文は随筆ながら、よく妙高高原を天下に紹介したものといえよう。この人ほど妙高高原町の紹介宣伝に努めた人はない。

〈3〉『明治大正史』⑮人物篇（実業の世界社）

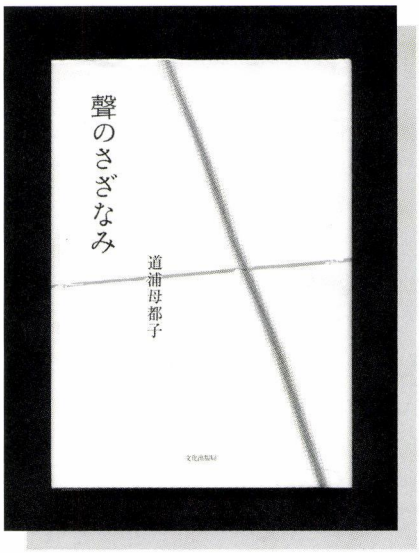
〈4〉ＹＭＣＡとは、Young Men's Christian Associationの略で、一八四四年にロンドンで創立されたキリスト教主義にもとづく国際的な青少年団体。東京ＹＭＣＡは一八八〇年（明治一三）に創立されて以来、青少年の精神・知性・身体の健全な成長を助ける活動を傾けている。

〈参考文献〉

編纂委員会編『名香山村史』
妙高高原町学校教育研究会編『わたしたちの妙高高原町』
町史編集委員会編『妙高高原町史』
妙高区協議会『妙高区史』
星野錫翁感謝会編著『星野錫翁伝』
実業の世界社編『明治大正史』⑮人物篇
妙高高原町郷土史愛好会「妙香」十五周年記念誌
牧田利平編『越佐人物誌』中巻

＊いただいた原稿を編集部において割愛させていただきました。

■読書びと



聲のさざなみ

道浦母都子著

文化出版局刊
一六〇〇円

何も言わず見つむるのみの我が愛を
君知らずして今日も過ぎゆく

高校三年の冬、南禅寺での先輩との初デートをうたって新聞歌壇に掲載された処女歌である。

ガス弾の匂い残れる黒髪を
洗い梳かして君に逢いにゆく

彼を追い上京した道浦は学園闘争の時を生き、催涙ガスの立ち込める安田講堂のシルエットを

炎あげ地に舞い落ちる赤旗に
わが青春の落日を見る

と絶唱、六〇年安保闘争の後自死した岸上大作にも重なる、時代と世代の表現者となった。

道浦母都子は朝鮮から引揚げてきた両親の下一九四七年和歌山県に生まれる。七二年早稲田大学文学部を卒業、在学中に歌誌『未来』に入会し近藤芳美に師事した。八〇年に、二年半で破れた最初の結婚生活の地、松江で詠い継いだ作品を主に、歌集『無援の抒情』を自費出版、

生きていれば意志は後から従きくると
思いぬ冬の橋渡りつつ

対なる性と不器用なまでに向き合い、裏切りの時代に眼を逸らすことのない生の記録として、歌集としては異例に版を重ねることとなる。

今日われは妻を解かれて長月の
青しとどなる芝草の上

修辞と技法を批判されてきた道浦は九一年の第四歌集『風の婚』（河出書房新社）で、二度目の離婚を経て、内に抱える〈重い時間の湖〉に〈草の匂いや柔らかな風の流れ〉を注ぎ入れ、伸びやかな光の世界を展開する。

産むことを知らぬ乳房ぞ吐魯番の
絹に包めばみずみずとせり

そして新世紀に上梓された『母ともっちゃん』（岩波書店）は、自分史として父母との葛藤と心の移ろいを綴る。平明な言の葉に歌を配し、素顔の道浦が記した〈人恋い日記〉であった。

『無援の抒情』は現在、岩波現代文庫（九〇〇円）

道浦母都子はインタビュー集『聲のさざなみ』を二〇〇二年九月に世に送った。登場する十人の女性たちは、社会学者・鶴見和子、画家・秋野不矩、随筆家・岡部伊都子、染織家・志村ふくみ、書家・篠田桃紅など現役で今なお創作の第一線に立ち続けている。七十代の原田康子・大庭みな子・石牟礼道子の三人の作家を除くと齢はすべて八十代から九十代にさしかかる。

俊成・定家以来の和歌の家を守る冷泉布美子や、〈ゆるやかに着てひとと逢ふ螢の夜〉の相聞句をもつ閨秀の俳人桂信子、など初めて横顔にふれる女人もいた。

楓大介の手になるモノクロームのポートレートに定着された〈老女〉たちの穏やかな眼差しの彼方に、がむしゃらに仕事をした時期を経た残照の海が拡がっている。

聞き書き、というより道浦の必死の求道行脚の記録ともいえる。突然、思いを歌に凝縮できないスランプに崩れた道浦を、「六十代になったら、バカみたいに元気になる。五十代のつらさはみんな体験する。」と励ます先達に、交感の時を重ねる歌人の喜びが伝わってくる。

私的な思いを記せば、我が敬愛する岡部伊都子の章で、『悲の器』の作家高橋和巳との交友を取り上げ、かれを「私の考えと、もうそっくりそのまま。」と信頼する岡部と、彼女を「表面静かで、いつ爆発するかしれない熱い熱い休火山」と評し、非戦への希い一筋に沖縄の骨にこだわるその後の岡部の半生を鋭く予感した和巳、の出会いを綴る一節に感ずるものがあった。

おみなよりおみなに渉る海原の
虹のごとしも聲のさざなみ

書名は道浦母都子のこの一首による。わが世代を見守る、母と同じ昭和を生きてきた十人の女性。装丁も清々しく、昏迷の時代に吹き渡る抒情の風はらむ一冊を薦めたい。（晋）

海西東陸



斎京十四春画

翔ぶが如く——といえば、司馬遼太郎の小説だが、この「翔ぶ」は、鳥が翼を広げて飛び舞う様を表していて、雄大な感じがする。「飛ぶ」は、鳥や飛行機が空を飛ぶことである。「跳ぶ」は跳躍、カエルが跳ぶなどと使う。

随分昔のこと、志望の大学にみごと合格して、勇んで上京した友人の話である。

クラス分けも済んで授業が始まったある日、体育委員になった彼は、クラスのみんなをグランドに整列させ、教官が来る前に、これからグランドを

「とびます」

と号令をかけた。

走りだす者、その場で跳躍する者、何故か呆然としている者……。

呆然としたのは彼も同じであった。俺は「意味不明のことを口走っているのか」「なぜだ、なぜだ」と、ショックは相当なものだったらしい。そして「方言」というものがあることを初めて知ったのである。

そのことを思い出したのは、つい先日、静岡の方言研究者で、大学の先生であったか、ラジオのインタビューに答えて、静岡の方言の中で最も独特なものは、

「とぶ」

でしょう。これには皆さんびっくりするらしいですよ—。

さては、彼の号令に反応して「とびたした」のは、静岡県（全県なのだろうか）人だったのか。

これもラジオで聞いた話から。

郡上八幡の「朴葉ずし」の紹介である。

季節の山菜や魚介類などを入れた五目ずしを朴の葉で包んだもので、郡上八幡周辺の広い地域にわたる郷土料理のようだ。ただし「柿の葉ずし」で有名な吉野では、柿の葉ずしよりも古くから伝わるといっている。中身は柿の葉ずしと同じ押し寿司である。

さて、本題にもどる。

このすしは、五月くらいが一番よいということだ。インタビューに答えた女性は、朴の葉が柔らかい時季でないと、葉が、

「こわく」

なりますので、ということであった。

「こわい」は、それこそ〈独特〉の方言だとばかり思い込んでいたが、とうとう出くわしてしまった。もっとも「おこわ」「こわめし」もあるので、硬いという意味では、あながち方言とばかりいえないようだが、これはと思うのが、辛いとか苦しいという使い方である。

以下のような昔話がある。この我地に、遠くから嫁いできた若妻が高熱を発して、往診した医者の、

「こわくないかね」

という問に、

「怖くありませんが、苦しいです」

と、答えたという。遠くから嫁いできた若妻が、ひとり不安に思っていないか、と、医者が慮ってくれたものと誤解（?）したためである。それでは「怖い」は、なんと言うのか。

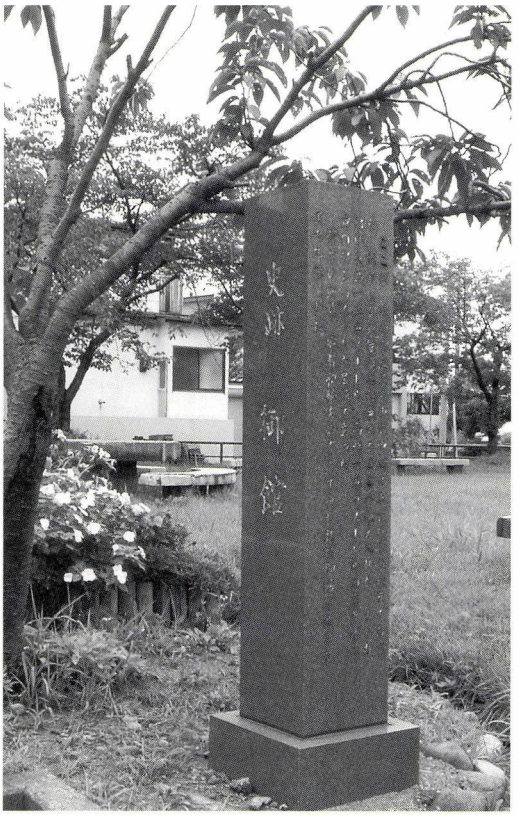
「おっかない」

である。残念ながら、これとても方言というわけにいかないようだ。

先の先生の批判をするつもりはないが「この土地独特」というのはあまりない。（漸）







上　発掘直前の御館周辺。手まえの一段高い畑の部分が御館跡
下　昭和 39 年の発掘現場
右　御館公園

御館（おたて）

上越市五智一丁目二一

上越北警察署の南側の住宅街を少し入ると「御館公園」がある。上杉家の家督を争った「御館の乱」で三郎景虎が立てこもった館跡として、近年、美男子景虎の面影を求めて訪れる若い女性の姿も多い。

昭和三〇年代まで、あたり一帯は水田が広がり、やや高い畑地を「御館」と呼んでいた。昭和三九・四〇年に行われた発掘調査によって、内郭東西一三五メートル・南北一五〇メートル、基底部で幅一〇メートルの土塁と二重の堀をめぐらす館跡であると確認され、夥しい陶磁器類の出土状況から、上杉謙信（長尾景虎）が関東管領上杉憲政のために造営したものであろうと推定された。また、発砲されて変形した鉛弾が数個出土し、御館の乱に使用されたものとしても注目された。

この発掘は、宅地造成に伴う緊急発掘調査の先駆けともいえるもので、当時の直江津市教育委員会と新潟大学の共同で、根津美術館・奥田直栄氏（なおしげ）（堀氏の末裔）の指導の下、大学生、地元の中高生によって行われた。このような大掛かりな発掘は、上越地域では類が無く、専門の大学生のみならず多数の中高生が参加したことも画期的なことであった（四二年から始まる福島城跡の発掘にも引き継がれた）。四一年、詳細な「御館跡緊急調査経過報告書」が出された。

宅地と化し失われる運命にあった「御館」は、地域の心ある人たちによって、一部が「御館公園」として残された。おかげで、今もそこに立てば、往時を偲ぶことができる。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

編集室から

■地域でさまざまな活動をしている多くの方々にお書きいただいているため、早め早めと思いつつ発行が遅れてしまいました。お詫びいたします。

■「川の恵み」は、関川中心になってしまいましたが、関川が海に注ぐまでの僅か六十数キロメートルの中に、思いがけない数々のドラマがあることに驚きました。関川の河畔に、隠れ里のようにしてある蔵々集落には、七・一一水害の水位を示す自然石の記念碑があり、あの水害がいかにすさまじいものであったか実感できます。子どもたちのための地域学習にもよいと思いました。

第4巻3号　11月1日 発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第四巻二号　通巻十四号
発行日／平成十六年九月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二―一八
直振興業内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二―〇〇八二
上越市国府三―九―五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成十六年九月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)